
脇役上等。

氷華

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

脇役上等。

【Nコード】

N4608P

【作者名】

氷華

【あらすじ】

「私の願い事、叶えてくれるの？」

是と答えたのが苦難の始まり始まり。原作とは全く違ったシンデレラ（の魔法使いの）ストーリー、ここに開幕！

「ほら、魔法使い！私の手と足となって働くのよ！！」

「あの、転職してもいいですか…？」

00話（前書き）

この物語は、フィクションです。

原作の「シンデレラ」の世界観を関係なし！とばかりのギャグコメになっていますので、それでもOKな方だけどうぞ。

00話

「本当にわたしの願い事、叶えてくれるの？」
是と答えたのが、物語の始まり始まり。

* * *

そんな彼女の下僕(?)の私は、魔法使い。
名前……は、容易く人に教えてはいけないから、まあ魔法使いだ。
私の仕事は、魔法の力で悩める乙女を救うこと。
今回はシンデレラの願いをかなえることになったわけ、なのだが。

あのお嬢さんの自由奔放なこと。

わたしのお願い、叶えてくれるの?という可愛らしい様子に心打
たれて早三ヶ月。

日々の私の仕事は掃除洗濯料理雑用。
え、待って。これって主婦では?
てか召使いではないでしょーか?
まあ下僕扱いだから当然かも。

「って、違う!!」
「どーしたの、魔法使い」

当のお嬢様が、鏡から視線を外して言った。
え、その手鏡、もしかして自分を見て、「きゃあああ、わたくし
今日も可愛いですわっ」とか思ってたんですか!?
——ちよっとひくわあ……。

「いや、なんか私の扱いについて考えていたというか」
「考えるまでもなく下僕でしょ」

シンデレラさん、即答。

あの、泣いてもいいですか…？

「時に、魔法使い」

「なんでしょー、お嬢様」

気のない返事に、お嬢様は不機嫌そうな表情を作った。
まったく、扱いづらい我儘姫だなあ…なんて、バレたら殺されそう。

「ウルの日に、義母様と義姉様方がお城の舞踏会へ行かれるんですけど」

「はあ」

ちなみに、この傲岸不遜なお嬢様、義理のお母様・お姉様方とは不仲らしい。
と言っても、お嬢様が勝手に苦手意識を持っているだけなのだけど。

「良いわね、舞踏会」
「そーですね」

別に、甘ったれたボンボンや、夢見すぎなお姫様たちの暇潰しの場になんて興味はない。

会場は無駄に人口密度高いし。
ただ、料理がおいしそうだなあと思う。

一流シェフの料理のあれこれ…ぜひ食べてみたい。

「わたしも行きたいわ」

「いいんじゃないですかーあ……」

……って、

「えええええ！？」

部屋中に響く私の声に、お嬢様は御尊顔をしかめる。

そして、（その性格さえなければ）世界中で一番可愛らしく艶やかな笑顔で告げるのだ。

「——お願いね、魔法使いさんっ」

転職しようかなあ、なんて本気で考える今日この頃。

——てか、魔法使いって転職できるのか……？

01話

☆これまでのあらすじ…？☆

今は昔のお伽の国に、傲岸不遜な我儘姫？シンデレラと、シンデレラのワガママに振り回されている可哀想な魔法使いがおりました。シンデレラの一言で、魔法使いは西へ東へ行ったり来たり。

下僕も真っ青な扱いようでありました。

魔法使いが本気で転職を考え始めたとき、シンデレラは言いました。

「わたくし、舞踏会に行きたいわ！」

しかし、シンデレラには舞踏会に来ていくような、目を見張るような豪華なドレスや靴がありません。

新しく見繕わなければいけないのですが、残念なことに財布は空っぽ。

これは無理だと頭を抱えた魔法使いに、シンデレラはおもむろに言いました。

「魔法使い、お前にわたくしが身につけるものを仕立てる榮譽をあげるわ！」

もちろん、魔法使いはそんな榮譽に毛ほどの興味もありませんでしたが、お姫様の命令は絶対なので、渋々うなずくしかありませんでした——……。☆

＊ ＊ ＊

それから3日が経った、満月の夜。

私は、仕立て上げたばかりのドレスを前に、感動にうちふるえていた。

月光を受けて煌めく、繊細でなめらかなシルク生地。

ふんだんにあしらわれたレースとフリルが、少女らしさを演出している。

極めつけは、胸元のワインレッドの大きなリボン。

やっと。

そう、やっと。

「完成した……ッ!!」

3日前。あのワガママ姫——もとい、シンデレラ嬢から御命令を承って、3日3晩屋根裏部屋（汚い、古い、埃臭い）に閉じ込められてひきこもり、死ぬ気で誠心誠意ドレスを仕立てた。

魔法使いなんだから魔法使えば？と思うかもしれないが、魔法を使うにはハシバミの枝とかユニコーンの角とか実在するのか疑わしいようなアイテムを秘境まで採りに行き、仰々しい魔法陣を書いて、長ったらしいルーンを唱えなければならない。

そんなことをするよりはハンドメイドの方が格段に楽なので、頑張ったわけだけど……。

いやもう、本当に死ぬかと思った。

よくよく考えてみれば、水以外何も口にしていない。頑張った私。ゴ○ブリ並の生命力だ。

人が感傷に浸っていると、誰かが扉が壊れるんじゃないかと思うような勢いで部屋に入ってきた。

「まほーつかいー、ドレスできたー?」

甘く気だるげな声。我が恐ろしのお嬢様だった。

「できましたよー。——ほら」

私が示した方向について視線を投げると、お嬢様は小さく微笑んだ。

「思ったよりも良い出来ね。癪だけど、まあちよつとは素敵だわ。褒めてつかわす！」

「はあ」

ずいぶんと上から目線のお礼だ。

あまり気に食わない、みたいな口調だが、目はきらきら輝いていて、それは嬉しそうに仕立て上げたばかりのドレスを身体にあてている。

「……お気に召したみたいでよかったです」

思わず口から出た言葉に、お嬢様ははっとしたようにドレスをベツドの上に投げ置いて肩を組む。

「べ、別にっ！褒めてあげたからって、調子に乗るんじゃないわよ！……そりゃ、まあ、ちよつとはね。かかか、勘違いしないでよ！ほんとに、すこーしだけなんだから！！」

ももごとと言うと、真っ赤になった頬を隠すように顔をそむけた。いまいち素直じゃないが、一応は気に入ってくれたらしい。

へそ曲がりて天の邪鬼なお嬢様だが、こういうところは可愛いと思う。

「——ちよつと、何ニヤニヤしているの？気持ち悪いわ」

汚いものツを見るような眼で見降ろされた。

……こういうところは、可愛くないと思う。

「……——て」

「え？」

聞き返すと、お嬢様は御尊顔をしかめた。顔を真っ赤にしたまま、尊大に仰る。

「ドレスに着替えるから！！手伝いなさいって言ってるのッ！！」

02話（前書き）

この物語は、フィクションです。

原作の「シンデレラ」の世界観を関係なし！とばかりのギャグコメになっていますので、それでもOKな方どうぞ。

02話

「じゃ、行ってくるわ」

レースとフリルをふんだんにあしらったドレスに身を包んだ麗しの我が姫君は、いつもの通り、傲岸不遜に仰り屋敷を出て行った。その後ろ姿を見送り、馬車の音も小さくなったところ、私は大きく息を吐いた。

「やっと…」

やっと、私のための自由な時間が!!

* * *

「…とは言ってみたものの」

はい。私こと魔法使いは、いまお城にいます。

シャンデリアの輝きがまぶしいですねえ。てか隣のご婦人方が五月蠅い。

と申しますのも、これには浅くて狭い事情がありまして…

時は戻って今日の夕刻。

ちょうど、ワガママの君——いや、シンデレラ様が夜会用のドレスに着替えられたころ。

「ねえ、魔法使いい」

鏡に向かってお姿の再確認をされつつ、お嬢様が声をかけてきました。

「そういえば、あなたに手紙が届いていてよ？」

そういつて渡されたのは、クチャクチャになっている紅の封筒。

……なんでこんなにクチャクチャなんだろ。

呆れつつ封筒を裏返すと、流暢な筆跡で「きみのいいひとより」。

（はぁ？）

中をみるまでもなく、間違えて届けられた手紙ですね。

「そーなの？じゃあ、本当の持ち主さんへ届けて頂戴ね」

「了解ですー」

もう一度封筒を裏返すと、宛名には「我が愛しの姫君へ」とある。

「…あのー、お嬢様？」

「なあに？」

「この宛名では、届くものも届きません」

訝しがるお嬢様に見せると、たしかにねとうなずいた。

「じゃあ、焼くなり煮るなり処分しちゃって」

……焼くのはともかく煮たりはしませんから。

「でも、捨てる前に中を確認してはどう？届け先のヒントがあるかもしれないわ」

お嬢様にしては珍しくマトモなことを…げふんごふん。それはナイスアイデアです。

ということ、早速中を拝見することにしましょう。

「なになに…“麗しの妖精”へ……？」

さっきから思ってたけど、この手紙の送り主、かなり自分に酔ってるカンジです。キモイ。

で、内容はとていいますと……。

我が麗しの妖精へ

ああ、ぼくのいいひと！

君は今日も、その美しさで僕を悩ませる！！

「うわ……。なにこれ。キモっ！まじ引くわぁ……」

覗きこんできたお嬢様が、早速けなしはじめます。

——中略——

きょうは、君に招待状を送ろうと思う。

なんの招待状だと思う？

おどろくなかれ、なんとあの舞踏会への招待状だよ！

ぼくのコネクションを最大限に利用して手に入れたんだ。

君の驚く顔を想像すると、あゝ鼻血が出てきてしまった！！

いけない、手当てをしないとね…。

まあ、そういうことだ。

では、ウルの日に会おう！

「……なあにこれ、この世の気持ち悪さをすべて詰め込んだくらいに気持ち悪いわ。吐きそう！」

弱弱しい声で感想を口にしたお嬢様が、口元に手を当てて「うぷ」

——って、吐かないでくださいね！？

何日かけて縫ったと思ってるんですか、まったくもう！

「ウルの日に……って、今日ですよ。それにコレ、お嬢様のもってるカードと同じでは？」

薔薇の透かし彫りの美しい、淡紅のカード。

間違いなく、今夜の舞踏会の招待状だ。

それを見たお嬢様は、呆れ顔で言った。

「なら送り主のコイツは根っからの馬鹿野郎ね。こんなの、年頃の娘であれば誰でも手に入れられるっていうのに」

「……………」

いやいや、あなたがそれを言いますか。

私がこんな紙つき一枚を手に入れるためにどんなに苦労したこ

とか……。

（てゆーか、あのお嬢様が素直に義母様からカードを受け取っていれば……）

まあ、過去のことを蒸し返してぶつぶつ言ってもしょうがないのだけど。

真剣そのものの顔で鏡と対峙しているお嬢様を白い目で見ていると、柱の時計が時間を告げた。

「あ、いけない。もう時間ね。じゃ、わたしはいつてくるから」

「あ、はい。じゃあ私も――」

お供します、と続ける声は、ボタンと閉まった扉に遮られた。

（つまり、私は留守番ってことか……）

どこまで行っても根性のねじ曲がった野郎だな……！

あまりの仕打ちに呆然としていると、階下からお嬢様の声が聞こえた。

「ちょっとお、早く見送りに来なさいよねえ！」

このクソ野郎ッ！今に見てろよ……！

机の上のカードを見つめて、私は極上の笑みを浮かべたのだった。

03話（前書き）

内容変更。前回の初めの方は、とりあえずスルーの方向でお願いいたします。

03話

静まり返った屋敷のなか。

カーテンの隙間から差し込む月光が、淡く室内を照らしだす。
こういう様子を、人は「静謐」だというのだろう。

私（職業魔法使い・転職考え中）は、大きく伸びをしてみた。

「平和だあ……」

神様。私、このお屋敷に来るまでは、ささやかな幸せに気づこう
ともしませんでした。

やばい、幸せすぎてにやけが止まんない。

せっかくだから、くすねてきたシャンパンでも飲もうかなあと、
実にテーブルの上に置いていたそれに手を伸ばした、そのとき。

バンツ！！……ドン、ダダダパリクツガシャンツダダダダ……

まるで地響きのような世にも恐ろしい音が聞こえる。

——しかも、迫ってきた。

しかし、間に聞こえる破壊音はなんだろう。

空耳ダヨネ。A H A H A ☆

そんなことを言ってる間にも、物音は迫ってくる。

そして、扉が——……

バンツツツ！！……ミシ

「まほーつかいいいい！！」

開いた。

……というよりも、壊された。

ひとりの破壊神、いや、シンデレラ嬢によって。

「お嬢様、扉！扉っ！！どーするんですかつ！！」

蝶番が斜めにぐんにやり曲がって、見るも無残な状態になっている。

いくら古めかしい扉だったとはいえ、これはあまりにも……ひどい。

しかし、当のお嬢様はというと。

「扉？そんなもので修理すればいいでしょう！？」

扉を一瞥、眉をひそめ、私に向き直る。

後で修理って…。

修理するのは、私なんですけど……。

「いいから、わたしの話を聞きなさい！」

「はぁ……」

ベッドに倒れこみ、足をぶらぶらさせて靴を放り投げる。

きれいな放物線を描き宙を舞ったそれは、姿鏡に命中し——……

合掌。

床に散らばった鏡の欠片が、月光を反射して夢幻の様だ（遠い目）。

「事はさかのぼってお城のダンスホール……。わたしが、男共に囲まれていたとき——」

04話

と、そこでお嬢様の口の動きがぴたりと止まった。

桜色の唇が、これ以上ないほどに戦慄き、頬は紅潮し、青い瞳は怒りに燃えている。

「――やっぱり、いいわ」

「え？今なんておっしゃいました？」

吐息ほどの小さなつぶやきは、わたしの耳に届かない。

聞き返すと、答えのかわりにシャンパンの瓶が投げつけられた。

反射的にかわすと、頬を一陣の風が撫でて、次いで破壊音。

ベッドから漏れ聞こえた苛立たしげな舌打ちは、あえて聞こえなかったことにしておく。

「あいつ、思い出ただけではらわたが煮えくりかえるわ！次会った時には、ヒールで思いっきり足を踏んでやるんだから……！」

「はあ……」

どうやら、口に出すのも忌々しいほどの衝撃的な出来事があったらしい。

私としては、ふたりが巡りあわない事を心から願う。

「わたしのことはもういいわ。魔法使い、お前は？」

「え」

「え、じゃないわよ。わたしが留守の間、お前は何してたの？」

言えない。

絶対、言えない。

申し付けられていた屋敷の掃除をサボって、自分も舞踏会へ行っていたなんて、口が裂けても言えない……！！

我儘姫の横顔を、チラリとのぞき見る。

完全なる不機嫌。

このまま口を開かなかつたら、次はきつと……

殺られる！

「えーと…。まあ、あれですね。普通に掃除ですね」

「――掃除するにしたら豪華な召し物ね？」

「うっ」

ただいまの服装、ワイン色の豪華なドレス。

実のところ、このドレスはお嬢様の舞踏会用に仕立てたものだったりする。

しかし、お嬢様の胸が大変残念だったため、あえなく断念。

「……まあ、深くは追求しないでおくわ。お前が可哀想だし」

「……………」

なんか、憐憫の目で見られているのですが。

すっごく勘違いをされている気がするのですが。

問い詰められなくてほっとしたような、あらぬ想像をされて虚しいような……。

「それよりまほーつかい。お前、ドレスの上にもマントをかぶってるのね」

「まあ、魔法使いですから。コレないと普通の女の子ですし」

「ソレあるとただの変質者よ」

「……………」

何でしょう、この悲しさとやるせなさ。

「ま、いいけど。そろそろ素顔見せなさいよねー」

ベッドから身を起こしたお嬢様に、思わず身構える。

何せ、相手は傲岸不遜唯我独尊我儘放題姫（と書いてシンデレラと読む）だ。

すると、お嬢様はあからさまにむっとして、のそりところらへ一歩踏み出してくる。

「か お み せ ろ ！」

こんなときに世界一の可愛さ（自負）発動とは。

なんていうか、いろんな意味で残念なひとだ。

「ね、ね、よいではないかあ……！！」

「いやですいやです！近寄らないでください！それよか発言が変態です……！！」

思考が定まらない私に、ゆらりふらりとにじり寄ってくるお嬢様。足元がおぼつかないのと発言が変なのは、まさか床にこぼれているお酒のせいなのか。

「う、ふ、ふ。下僕が主人に逆らおうなんて、一億年早くてよお！！」

「ひやああああああ……！！！！」

お嬢様が、飛びかかってきた。

ドレスのスカートが夢の様に広がり、視界を奪う。

「――て、させるかああああ!!」
「きゃあ!?!」

はい、避けましたとも。

結果。

ばす。と、何とも形容しがたい音と共に落下する我が主。

まあ、誰であろうとも重力は避けられません。

当然の結果ですね。

「いったあ……。下僕の分際でなにをするのよ…っ!!」

床にへばりついたまま、声をわななかせるお嬢様を一瞥していった。

「酔いは醒めましたか、お嬢様」

「醒めたも何も……!! 屈辱よ……!! 今日で二番目の屈辱だわ…っ
っっ!!」

小さな手が、力強く床を叩いた。

みしりと床が鳴る。

私の背中を冷たい汗が伝った。

これはまさか、まさか……。

「いったあああい!!」

部屋に響き渡る、大音量の悲鳴。

見れば、お嬢様が両手から血を流していた。

……といっても、切り傷で、ちよつとにじむ程度のショボいやつ。
どうやら、鏡や瓶の破片に触れてしまったようだ。

「やだやだっ、血よ！死んじゃうっ！」

「そんな切り傷くらいで…大袈裟ですふべっ」

油断して近づいたところを頭突きされる。

駆け抜ける痛みに一時戦闘不能です。

「下僕っ、早く治療して！！こんな時こそ魔法よ魔法！！」

「魔法魔法って簡単にいますけど、実際は下準備とか大変なんですよー？」

「魔法じゃなくてもいいから早くして頂戴！！死んじゃうわ！！」

流石に子供みたいに泣き叫ぶお嬢様が憐れになり、下の階から包帯やら消毒液やらを持ってきて、治療してやる。

少し経つと、お嬢様も落ち着いて来て、背中を向けてベッドに横になると、いつもの口調で言った。

「……感謝してやらないこともないわ」

まったく、素直に「ありがとう」って言えばいいのに。

そんなこんなで、怒濤の一日が過ぎていった。

———このときはまさか、嵐がやってくるなんて少しも予想していなかった。

05話

いつにもなく真剣な顔で、一枚の紙とにらみ合いをするシンデレラ嬢。

さながら戦闘中といった様子で、お嬢様の表情は硬い。

そのさまを、私は本を読みながら監視——いや、見守っていた。

「——ねえ、下僕」

一時休戦なのか、紙から目を離し、足を組んで、呼びかけてくるお嬢様。

その態度が美少女っぷりを台無しにしていることに、果たして気付いているのかいないのか。

「下僕じゃないです、魔法使いです。で、なんですか？」

「そろそろ」

「だめです」

お嬢様の言葉をさえぎって、私は断言した。

すると、お嬢様の瞳が一瞬にして燃え上がる。

「わたし、まだ途中までしか言ってなくてよ？」

「でも、どーせ『そろそろ勉強やめたいのだけど?』とか言うつもりだったんでしょ?」

きっと凶星なのだろう。言葉に詰まるお嬢様に、とどめの一言を投げつける。

「だめですよ、これだけは。——お義母様のお言いつけですからね」

今度こそ、お嬢様が完全停止した。

お義母様とは、我儘放題傲岸不遜のシンデレラ嬢の数少ないブレ
ーキ役のおひとり。

血のつながりのない、いわば継母である彼女に対し、お嬢様は苦
手意識を抱いているようである。

ちなみに、ふたりのお義姉様方もまた然り。

ちなみに、苦手意識を持ち距離を置きたがっているのはお嬢様だ
けで、しかし苛められているとかは全くなく、むしろ可愛がられて
いる気がするのだが――……。

お嬢様は、分らないひとだ。

「きつとお義母様は、わたしのことがお嫌いなのだわ。だからこん
な苦行ばかりお強いになるのよ……！」

「はあ」

それは、絶対にないと思いますけど。

と言うか、12・3歳程度の数学が『苦行』って……。

だから、お義母様が勉強を教えてあげてと泣きついてくるわけだ。
改めて我が主の将来が心配になってきた。

「だいたい、女に勉学なんていらなのよお」

「それは違います、お嬢様。勉学とは教養です。いやでもなんでも、
貴族の令嬢たる者、できなくてどうするんですか。恥ですよ、恥」

「わたしには生まれ持っても神がかった美しさがあるもの、問題な
いわ！」

……問題山積みでしょう。

特に、その残念なおつむとか性格とか、とにかく容姿以外すべて。
私の憐憫の視線に気づいていないのか、お嬢様はなおも語る。

「大体ねえ、教養だの品位だの口やかましく言う輩に限ってブスのよ！容姿を教養で補ってるのよ！！そのぶん、わたしは神に愛されたかのごとき美少女だもの、何人たりともこの美しさの前にひざまずくのよっ！！」

「……………」

もはや言葉も出ません。

呆れとか怒りとかを通り越して、感動すらこみ上げてきました。ほんとう、この性格さえなければなあ…。

「あのですねえ……」

お義母様に懇願されたこともあり、お説教をと思い口を開いたとき。

チリリン、チリリン。

来客を告げるベルの音が、かすかに聞こえた。

「お客様をお待たせするのは良くないわ、早く行って差し上げて？」

お説教から逃れられたと、花のほころぶような笑顔で告げる。

こんなときだけ、いいひとぶるな！

……なんて、口が裂けても言えない。

一応、ご主人様だし。上司だし。

そんなこんなで。

「はいはい、今行きまーす」

ガチャリ。

ギイイイイ……。

「お待たせいたしました——……」

「遅いぞ、愚民！」

「ごきげんよう、お嬢さん」

突然の予期せぬ来客が。

「——え……？」

お嬢様と、ひいては私の運命さえも動かすような嵐を連れてきたのだった。

しかしまだ、誰もそのことを知る由などない——……。

05話（後書き）

しかし、特にシリアス展開に転がるわけでもないです。↑

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4608p/>

脇役上等。

2011年5月17日04時21分発行